

山梨の三角塙形土製品

田 代 孝

1. はじめに

三角塙形土製品は、三角形の柱状を呈する縄文時代の土製品の1つである。三角形柱状土製品、三角状立体土製品、三角形土版、石冠状土製品、土冠などの呼びかたもされていたが、その形状や類似する石冠から呼称されていると思われる。この特徴的な土製品については、1920年代に紹介され始め、その用途は非実用的なものと認識され、護符、装身具などと推定されている。

その後の研究にはやや空白がみられたが、1980年には小林康男氏が43例を集成し、「三角塙形土製品考」(『長野県考古学会誌37』1980)を発表している。さらに1983年には小島俊彰氏が70例を集成して「三角塙形土製品」(『縄文文化の研究9』1983)を発表している。

小林氏の集成段階では、富山・石川・新潟を中心に長野・埼玉・千葉・東京・福島・岩手・青森の10都県43例を上げているが、小島氏の集成によれば、山形・秋田・茨城を加え13都県70例を上げている。なお小島氏は宮城県のものについては検索が不十分なのかもしれないとしているが、栃木・群馬・神奈川・山梨県には類例を上げることができなかつたと断わっている。

山梨県の三角塙形土製品は、小島氏の集成段階の前後に3例を確認することができたので、ここに山梨の三角塙形土製品の報告を行い、あわせて若干の考察を行いたい。

2. 山梨出土の三角塙形土製品

上の平遺跡(東八代郡中道町下向山)

甲府盆地の低地に向かって舌状に突き出す丘陵上に位置する。1979年からの発掘調査によって上の平から東山地区にかけて方形周溝墓群が130基ほど確認されている。三角塙形土製品は、上の平地区の方形周溝墓群の覆土中から多量の曾利期の土器片と共に出土したものであるという。

このような状況から遺構との関係は不明であるが、出土土器から推定するならば、曾利Ⅲ式の時期が三角塙形土製品の所属する時期と考えておきたい。

三角塙形土製品は、長さ8.5cm、高さ5.8cmである。形態は正面と側面からみると、まず側面形は二等辺三角形であり、正面形は長方形である。また長軸方向に径0.7cmの孔が穿たれている。側面から孔の位置をみると中心よりやや下部に穿たれている。さらに貫通孔としては片方側において外れている。

文様については、底面のみ無文で他の面は全て施文されている。文様は沈線による区画文と

渦巻文によって構成されている。

川又南遺跡（北巨摩郡須玉町川又）

須玉川の右岸の河岸段丘上に位置する。1985年に圃場整備事業に伴う発掘調査によって、縄文時代の屋外埋甕、平安時代の住居址などが確認されている。三角埴形土製品は単独出土であり、遺構との関連はないとされている。ただし出土地点付近の土器片は、縄文後期前半であったという。

三角埴形土製品は、長さ10cm、高さ7.0cmである。形態についてみると、側面形からは各辺とも反っていて、正面形ではゆるやかな弧を描いている。孔は径0.6cmほどで、側面の中心を貫いているが、片方側でわずかにはずれている。

文様は、沈線による渦巻文が全面に施されている。なお側面においては渦巻文で充填できない部分を沈線で処理している。さらに各稜の部分についても沈線を施している。このことから底面を意識した場合、いずれかの面を考えなければならないが、稜の最も厚くなっている部分を上にして、その直下の面を底面としてとらえておきたい。

郷蔵地遺跡（北巨摩郡須玉町比志）

塩川左岸の河岸段丘に接する小台地上に位置する。1986年、塩川ダム建設に伴う県道切替工事に先だって発掘調査がされ、縄文中期後半の敷石住居址が1軒検出された。

三角埴形土製品は、敷石住居址内の奥壁側の隅において検出された。その位置は東隅にあたり、敷石直上には胴部下半を欠失した深鉢形土器が逆位に置かれていた。三角埴形土製品はその傍らにおいて確認されたものである。また、丸石もすぐ側から検出されているが、さらに奥壁の北寄りには、石棒と柱状の石が横たわっていた。

敷石住居址内の覆土・床面直上から出土した土器から住居址の時期を考えると、縄文中期の最終末といえよう。出土した三角埴形土製品は、中期の土器編年という曽利Ⅴ式の時期に所属するものといえよう。

三角埴形土製品は、長さ7.8cm、高さ5.0cmである。側面形は正三角形であり、正面形は長方形である。孔は径0.8cmであり、側面形の中心よりやや外れている。孔の寄っている部分を底面と考えておきたい。文様については全面が無文である。

3. 三角埴形土製品の考察

山梨の3例について紹介したが、小林・小島両氏の研究成果に依拠しながら、山梨県の三角埴形土製品について考えてみたい。

形態について

まず大きさであるが、川又南遺跡が長さ10cm、高さ7.0cmで最大であり、郷蔵地遺跡が長さ7.8cm、高さ5.0cmで最小となっている。3例の平均は長さで8.7cmである。小島氏は各地の長さの平均を出し、岩手・福島で10cm、関東で8.9cm、長野で9.9cm、青森・秋田は7.9cm、富山・石川は7.7cm、新潟は7.2cmとなり、日本海側のものが7.2cm～7.9cmで、太平洋側の8.9～10cm

に比べてやや小さい傾向にあることを指摘している。このことから山梨の三角壻形土製品は、関東地方の8.9cmに近く、太平洋側の傾向をうかがうことができる。

形については正面形と側面形からみると、正面形では長方形となるものが上の平遺跡と郷蔵地遺跡の2例である。ゆるやかに弧を描くものが川又南遺跡の例である。側面形は長軸の断面形の観察から正三角形となるものが郷蔵地遺跡例であり、二等辺三角形が上の平遺跡例で、なお正三角形にも二等辺三角形にも含まれない特異な形として、各辺が反りをもつものに川又南遺跡例がある。

小林氏は43例中「側面正三角形を呈するもの21例、二等辺三角形が7例であり、正三角形のものが二等辺三角形の3倍ほど」とであるとし、正面形は「長方形が9例、弧を描くものが20例」とし、側面正三角形で正面弧を描くものが最も一般的であったと指摘しているが、小島氏は70例の分析から「4割位が正三角形、6割位が二等辺三角形である。」としている。両氏の集成数の違いが、正三角形と二等辺三角形の比率を逆転することになっている。ただし小島氏は「関東地方では二等辺三角形になるのが1例に対し、正三角形が5例と逆転している」ことにふれている。

山梨の3例からは、今後の出土例の増加をまって地域的な傾向など考えざるを得ない状況である。

つぎに、底面については明かにそれであると位置づけることができるのは、側面形が二等辺三角形となる上の平遺跡例である。二側面と二正面に文様がみられるが、一面のみ無文であり、その部分は二等辺三角形の底辺にあたるところである。

郷蔵地遺跡例は、側面形が正三角形でしかも全面が無文であることから、いずれを底面とするかは難しい。しかしわずかに孔の位置が寄っている部分が認められるので、そこを底面と推定しておきたい。

川又南遺跡例は、全面に文様があることと、側面形の中心に孔が存在することから底面を決めにくい、あえて正面形の背稜が最も厚い部分を上とした場合、それに対応する面を底面と考えることが可能かもしれない。

孔については3例とも穿孔されているが、穿孔方法は小島氏の観察によれば、両側から孔を穿ち途中で止めた資料もあるとしながらも、「両側面の孔の位置が違うものが多いので、一方向から、しかも粘土がやや固まってから穿孔を始めたものが多い」と指摘している。このことは山梨の3例からも、ほぼ肯定できそうである。また、孔内部の観察から郷蔵地遺跡・川又南遺跡の2例については、螺旋状の痕跡が認められる。

孔の存在や位置については、従来から三角壻形土製品の製作上の理由より、使用上の目的のために穿孔されたことが重要であると考えられている。孔の位置によって、紐を通して縛りつけると安定するものとそうでないものがある。さらに、つり下げるのに都合のよい場合もある。川又南遺跡例はつり下げるのに好都合であろう。上の平遺跡例は側面が明らかであり、二等辺三角形であることから何かに縛りつけた使用も考えられよう、郷蔵地遺跡例は正三角形で無文であることから、いずれの場合でもよいと考えられるのである。

ただし、使用期間を考慮しなければならないが、3例とも孔の部分に紐ずれの痕跡が認められないのである。また、全国例の中には無孔もあることから、紐を必要とせず何かの上に置くだけの場合も考えられ、孔のもつ意味については、さらに検討が必要であろう。

形としては、3例とも破損はなく完形品である。このことは小林氏の指摘のように「土偶のように破壊を伴う使用方法をもった土製品ではなかった」ということの傾向を示すものであろう。なお、三角埴形土製品の胎土、焼成、色調などについても特別な違いはみられないのである。さらに、山梨の3例では土偶などにみられる赤色塗彩は認められなかったが、小林・小島両氏の全国的な集成の中にも、その有無についてはふられていないことから、三角埴形土製品には赤色塗彩の例は無いと考えるべきであろうか。

文様について

山梨の3例中、有文が2例で無文が1例である。小島氏の集成によれば、70例中全面の様子がわかる56例から、有文46例、無文10例を報告している。2割ほどになる無文の三角埴形土製品の分布は、関東と富山・石川に集中しているとされている。

有文のものは、正面と側面の4面に施文したものが多く、次に底面を含めた5面の全てに施文したもの、正面と底面の3面、2正面のみ、側面のみの順になるとされている。

山梨の例は、無文が郷蔵地遺跡例で、有文は4面が上の平遺跡例、5面が川又南遺跡例となる。

文様のありかたについては、従来からいわれているように沈線文と刺突文が大半であり、一般的な土器にみられるような縄文は少なく、粘土紐を貼付したりするものはほとんどないといえるのである。上の平遺跡・川又南遺跡の2例とも沈線文のみで施文されており、全国的な例と一致している。

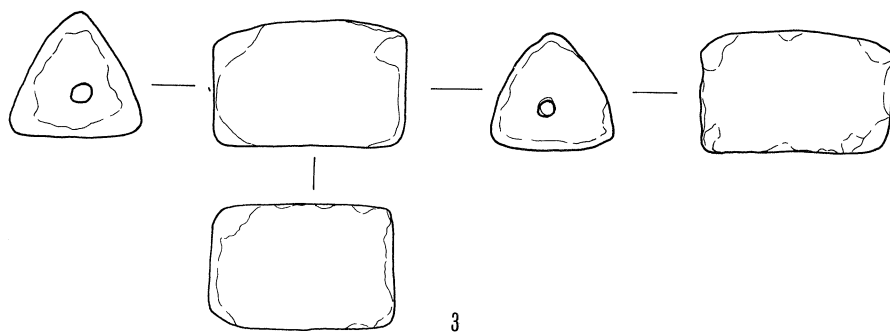
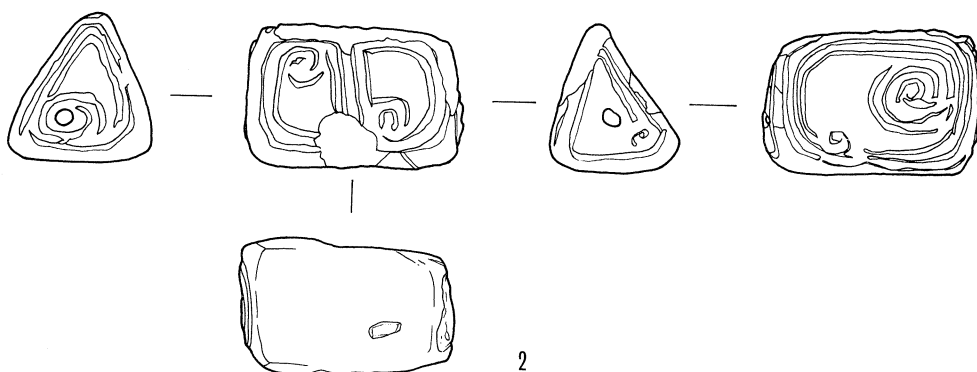
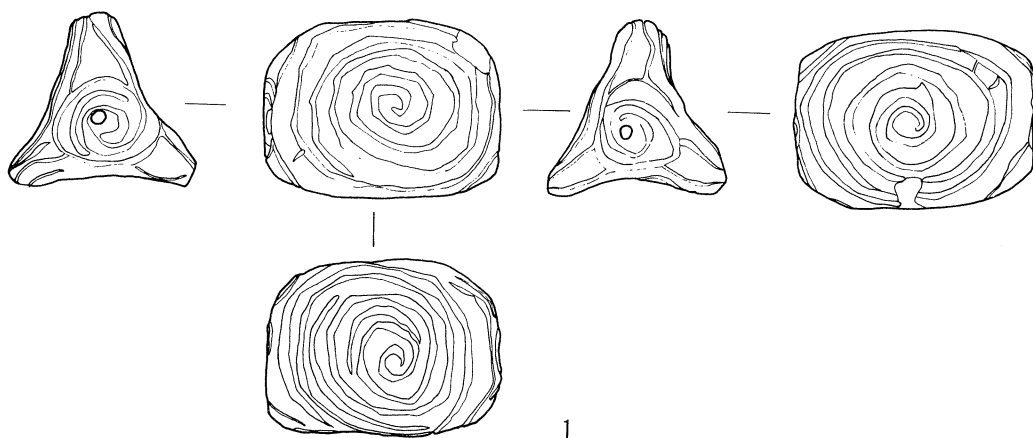
このように三角埴形土製品の文様に、多くの共通した要素・構成をうかがえることから小林氏は「土器における文様のように地域的な特徴、多様性がなく、均一性が強い」ということを指摘している。

なお文様構成の上で、小林氏は2正面の対称性で注意すべき例を石川県笠舞例であげている。「2正面にジグザグ状の沈線が引かれているが、これを分解して図示すれば、方向が違っている。だが、これを底面を下にしてのぞきこめば、文様は同方向を向くことになる。」と指摘していることである。山梨の上の平遺跡例においても同じ例としてあげることができよう。「三角埴形土製品の文様は、上からのぞきこまれることを考慮して描かれている」可能性を小島氏は強調している。

時期について

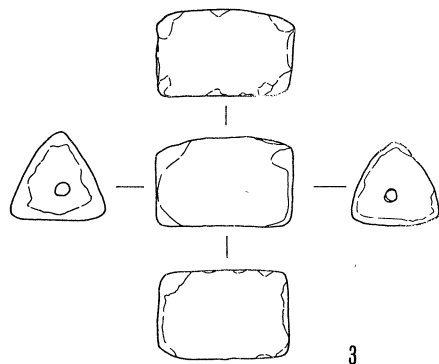
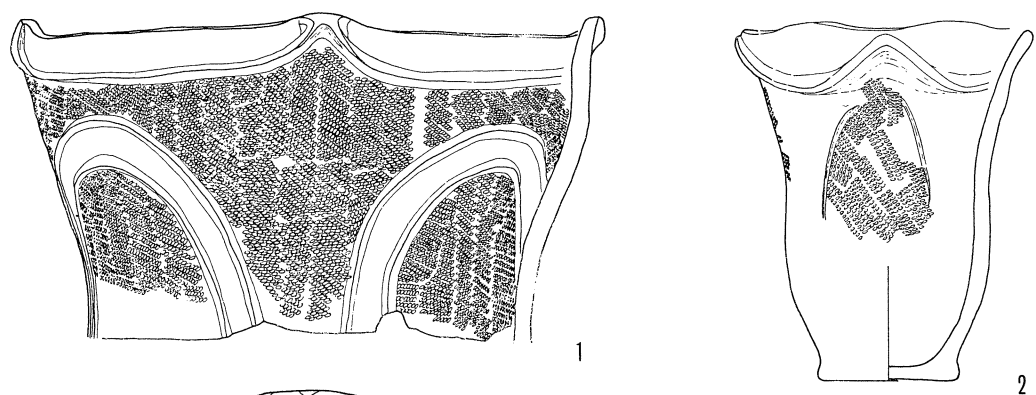
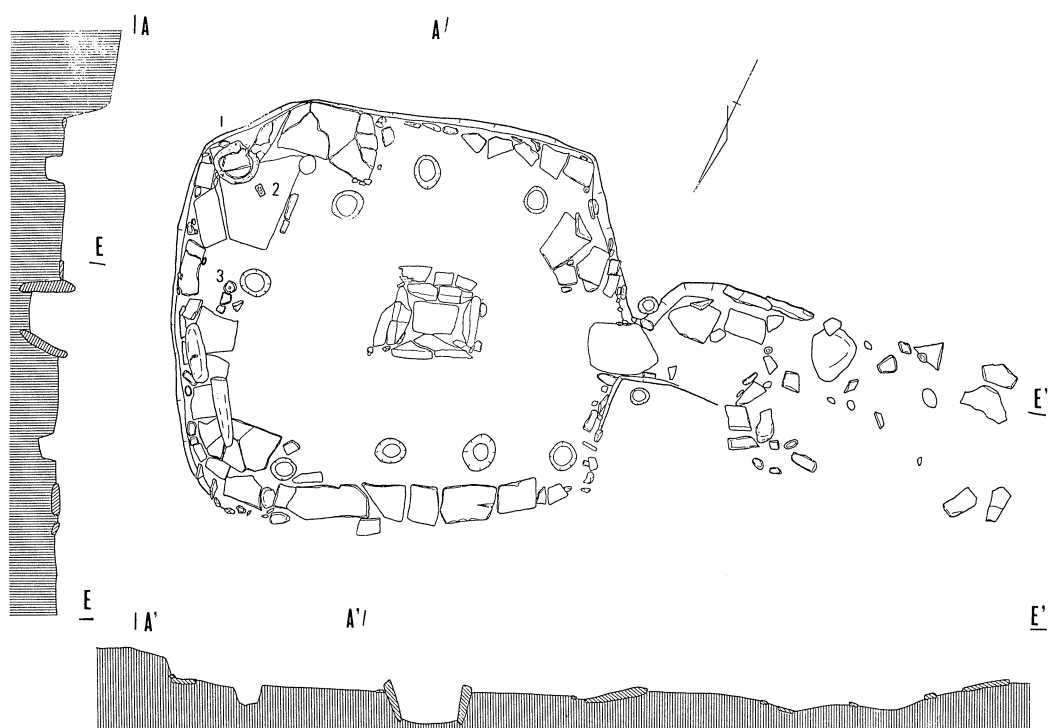
山梨の三角埴形土製品のうち、上の平遺跡例と川又南遺跡例は遺構との関連が明確でないが、遺跡出土の土器から前者が縄文中期後半で、後者は後期前半と推測されている。これに対して郷蔵地遺跡例は、住居址出土であることからその時期決定は可能である。

住居址は敷石住居址である。その時期は縄文中期後半に初源があり、後期後半に終わるとされているが、山本暉久氏によれば敷石住居の変遷を4期（「敷石住居」『縄文文化の研究8』



0 10cm

第1図 三角塼形土製品実測図 (1. 川又南遺跡 2. 上の平遺跡 3. 郷蔵地遺跡)



第2図 郷蔵地遺跡住居址平面図と遺物実測図

1983)に分けている。郷蔵地遺跡の敷石住居址は、そのうちの「第Ⅱ期成立期—中期末・後期初頭期—」に相当するであろう。

この住居址内の敷石上に三角埴形土製品と並ぶようにして検出された深鉢形土器は、その形態・文様から中期最終末の時期を与えることができよう。また、このことから敷石住居址の時期も決定されてこよう。敷石住居址や伴出土器などから、三角埴形土製品については、中期最終末に所属するものといえる。

山梨の3例は、縄文中期後半から後期初頭の間におさまるものであり、全国的な三角埴形土製品の初源から消滅の変遷の中に入るものである。

用途について

三角埴形土製品は形態・文様などから、その出現期より消滅にいたるまで、大きくは変化していないことが指摘されている。山梨の3例からもそのことはいえるようである。

かつて八幡一郎氏・藤森栄一氏が、三角埴形土製品の孔に注目し、紐を通して用いたことを強調されたが、小林氏によれば「物の上に置いたり、何かに縛りつけたり、物に釣り下げたりして使用されたもの」とし、使用方法が多岐にわたっていたと考えている。

また、小島氏は「三角埴形土製品は置くべき面を意図して作られたものが多い」とし、置くことができる三角形のつつ状の形態であることが、その基本とし、「文様の有無や違い、あるいは孔の有無やその位置などが、この土製品をより引きだす機能をより十分発揮させたもの」であり、本質的な相違として考えるべきではないと指摘している。

三角埴形土製品の用途について考えるならば、その出土状態に注目する必要がある。従来、遺構との関連が明かになっているものは数少ないが、住居址・配石遺構・墓壇例などが知られている。

なかでも住居址からの出土例が多く報告されている。覆土や床面上から出土しており、他の土器などの遺物と同じであり、とりわけ特別視するものでないと言われている。ただし富山県北代遺跡や石川県笠舞遺跡の例は、住居址の壁際からの出土であり注意されている。さらに東京都西秋留遺跡では、敷石住居址から無文のものが出土しているが、出土状態は不明である。

山梨の郷蔵地遺跡の例は、敷石住居址の奥壁で、東隅にあたる位置の大きな敷石直上に無文の三角埴形土製品が置かれている状態で検出されている。すでに伴出遺物としては、石棒や丸石などの特殊な遺物を紹介したところである。

小林氏は長野県中原遺跡の2号住居址から土偶・土盤が伴出していることや、東京都宇津木遺跡の配石遺構1から打製石斧2、石棒片1が伴出していることなどに注目して、三角埴形土製品は、「土偶・石棒等の呪術的・祭祀的色彩の強い遺物と伴出することが顕著であることが指摘できよう。」と述べている。

郷蔵地遺跡例は、敷石住居の性格は別にしても、住居内の壁際において石棒や丸石などのきわめて特異性のある遺物と共伴していることは、小林氏の指摘と一致するところである。なお石棒祭祀は、中期後半・後期初頭において屋内祭祀として盛行しているが、しだいに屋外祭祀へと移行するとされている。三角埴形土製品についても、福島県山王館遺跡では墓址内からの

出土もあるが、宇津木遺跡からうかがうことができるように、屋内から屋外へ移行している傾向が知られよう。

このような様相は、三角埴形土製品が石棒などと同様に、縄文中期後半になって祭祀や呪術が多様化する中から生みだされたものといえるのであり、しかも石棒などに近似した要素が三角埴形土製品の中に考えることができるのではなかろうか。

4. おわりに

山梨の三角埴形土製品を紹介し、若干の考察を行い、私見を述べてみたいと思ったが、小林・小島両氏のすぐれた研究成果を追うことだけに終わった。

縄文中期後半から後期初頭にかけて、全国でも70数例の三角埴形土製品である。従来の分布圏にあって空白の県にも、いずれ出土例が報告されよう。しかし、今日まで祭祀具・呪術具としての三角埴形土製品の全体数は少ないといわざるを得ない。今後とも用途などについて多くの類例を加えて、検討したいと思う次第である。

なお山梨の三角埴形土製品について、資料提供、ご教示をいただいた小林広和氏・山路恭之助氏に感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 八幡一郎「立体土製品」『考古学研究』第2巻第3号 1928
- 2) 近藤勘次郎・藤森栄一「越後中期縄文文化馬高期に於ける土製装飾具の発生に就て」
『考古学』第8巻10号 1937
- 3) 小林康男「三角埴形土製品考」『長野県考古学会誌』37号 1980
- 4) 小島俊彰「三角埴形土製品」『縄文文化の研究』9 1983
- 5) 須玉町教育委員会「川又南遺跡」 1986